解説資料

さぬきの教員　授業づくりの三訓について

香川県教育委員会

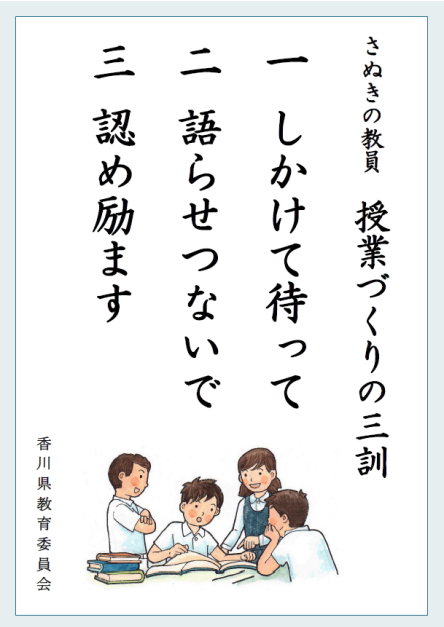
考えをめぐらせている子どもが、すっと腑に落ちたときの表情を思い浮かべてみてください。「できた、わかった」という子どもの喜びは、教員の喜びでもあることに気が付きます。子どもは、だれもが、「分かりたい」「できるようになりたい」という気持ちをもっています。教員には、その気持ちに正対し、分かる授業をするために最大限の努力をする責任があります。

令和２年度に設置した「小・中学校における新しい指導体制の在り方検討委員会」において、これまでの香川の教育 10 年を振り返るとともに、今後 10 年を見据えた教育の在り方について話し合いました。

そこで見えてきたのは、丁寧で緻密な指導を行ってきた教員の姿や、授業において受け身になりがちな子どもの姿でした。また、自尊意識を高め、子どもが興味や関心をもてる授業へと改善することの必要性も指摘されました。

また、令和３年１月の中央教育審議会答申では、「令和の日本型学校教育」の構築を目指し、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学び」の充実が謳われました。そこで重視されているのは、「子どもが主語となる学び」です。

授業づくりは不断の改善の営みです。教育の大きな転換期を迎えた今、子どもたちが自ら考え、学びを紡いでいくために、私たちはどのような授業づくりを心がければよいのでしょうか。



子どもの実態や教員の持ち味が様々であり、それゆえ、そのアプローチは実に多様です。そこで、県教育委員会では前述の検討会のまとめ等を踏まえ、今後、香川県の先生方に必要であると考えられる点を３つ示し、「さぬきの教員　授業づくりの三訓」として掲げました。

１　授業づくりの三訓－①『しかけて待って』

「しかけ」とは、教員の意図的な働きかけのことを言います。先生や友達から投げかけられた問いについて考えているとき、ふと目をやった先の壁面に、ヒントとなる既習内容や関連事項が掲示されていたら、子どもたちはどのような反応を示すでしょうか。他にも、子どもたちが話し合いたくなる課題設定、活動に参加しやすくなるツールの活用、多様性のある会話が生まれる学習形態、平等に全員が参加できるようなルール設定など、ねらいに応じた多様な「しかけ」があります。

大切にしたいのは、教員の説明は最小限にし、子どもが試行錯誤する時間を最大限確保するということです。子どもたちの中で生まれた疑問や考えが言葉となって表れるまで、教員には「待ち」の姿勢が求められます。教員が待つことで、子どもの自ら学ぼうとする態度を育みます。

教科等の面白さに気付き、他と協働しながら生き生きと学ぶ子どもを育てるために、毎日の授業で「しかけて待つ」姿勢を心がけましょう。

２　授業づくりの三訓ー②『語らせつないで』

子どもの言葉で「語らせ」その言葉を教員が「つなぐ」ことで、学びが子どもたちのものになります。授業では、個と集団の学びは深いかかわりがあり、一人の発言が集団としての学びを深めたり、集団の中で多様な意見を聞くことで個の考えがさらに深まったりします。教員は子どもたちの反応を予想し、大小様々な声を拾うため、感度のよいアンテナを張り巡らせることが大切です。

そして、子どもたちに、ひらめいたり気が付いたりした様子が見られた時には、それについて語る時間も確保しましょう。例えば、「あっ、そういうことか。」「なるほど。」との声が聞こえた時に、教員が「今、考えていることをみんなにも分かるように伝えられますか。」という声をかけ、発言をつなぎます。子どもの発言は、時に教員や周りの子どもたちが思いもしなかった深みへと導いてくれます。

このようにタイミングよく、子どもの思考を方向付ける助言を行うのは教室のファシリテーターである教員の仕事です。子どもの思考に寄り添い、肯定的な言葉で称賛したり、子どものつぶやきを全体に広げたり、時には、思考を「ゆさぶる」ことで知的好奇心を刺激したりしながら、子どもたちの頭の中にあることを引き出し、語らせ、つなぎましょう。

３　授業づくりの三訓ー③『認め励ます』

授業を通して、一人一人の子どもを「認め励ます」ことは、前向きに課題解決に取り組もうとする姿勢だけでなく、次の授業に対する意欲付けにもつながります。

ここで意識したいのが、「認め励ます」というのは、ただ単に「ほめる」ことではないということです。「ほめる」という行為は、一般的に大人の基準で一定の水準に達したときの評価として行う場合が多いですが、子どもは、自分たちなりの基準において、「認められたい」と感じているということも考えられます。

教員にはそういった子どもの基準も意識し、「できる」「できない」といった結果だけでなく、課題解決に向けて「これだけ努力した」などの学びの過程を的確に捉えて「認めて励ます」ことを心がけましょう。このことは、子どもが自分の言動に安心感や自信をもったり、多様な考えを出し合うよさを感じたりする姿にもつながります。中には、みんなの前で励まされることを苦手とする子どももいることから、グループ学習での学びの過程を取り上げて、集団を「認めて励ます」ことも効果的です。

「分かるようになってもらいたい」「できるようになってほしい」という教員の願いは、言葉や態度にせずとも、自然と子どもたちに伝わるものです。

しかけて待って　語らせつないで　認め励ます

明日からの授業で、主語である子どもがどのようになるという述語が生まれるのでしょうか。授業で教員が何を伝えたかではなく、子どもが授業を通して何が分かり、できるようになったかが大切です。

授業後、満足感や充実感いっぱいの子どもたちの笑顔が見られるよう、さぬきの教員として、この三訓を心にとめて授業づくりに励みたいものです。